

罪責感の認知・情動的側面が外傷後ストレス症状に及ぼす影響

Influence of Cognitive and Emotional Aspects of Guilt on Post-Traumatic Stress symptoms

中澤 佳奈子 (Kanakano Nakazawa) 指導：鈴木 伸一

【問題と目的】

外傷後ストレス障害(Posttraumatic Stress Disorder: PTSD) 生死に関わるような嫌悪的で恐ろしい体験をした人に見られる、行動的・情動的な反応のとされている (APA, 2000; Spates, 2003)。PTSDに対する治療においては、トラウマ焦点型の認知行動療法 (CBT) が介入の第一選択肢であるとされているが (Asukai et al., 2008)、治療未反応や治療からのドロップアウト率の高さといった問題点も指摘されている (廣常ら, 2005)。近年、このように治療効果が得られにくい患者の特徴として、トラウマに関連した罪責感 (Trauma-Related Guilt: TRG) が指摘され (池埜, 2002)、TRGの高い者はPTSD症状の改善度が低いことが示されている (Arntz et al., 2007)。しかしながら、TRGとPTSD症状との関連について実証的に検討した研究は少なく、その関連性は未だ明確ではない。したがって研究においては、個人特性の罪責感がトラウマ体験後の罪責感の認知 (自責的認知) や情動的側面 (TRG) に与える影響とこれらの出来事依存性の罪責感がPTSD症状に与える影響について検討する。これにより、PTSD症状の維持や生活支障度に影響する罪責感の側面が明らかとなり、PTSD症状を呈する者の状態像により適した介入や治療内容の選択が可能になると考えられる。

【方法】

調査対象者：首都圏および東海地方に存在する大学に在籍する学生174名 (男性54名, 女性120名, 平均年齢 20.90 ± 5.02 歳) 及び首都圏の精神科外来に通院するPTSD患者24名 (女性24名, 平均年齢 46.88 ± 8.83 歳)

調査材料：(1) 性別, 年齢, (2) トラウマ体験の有無と内容, 経過期間, Peritraumatic Distress Inventory日本語版 (PDI), (3) PTSD症状および関連する認知, 情動反応 (The Impact of Event Scale-Revised日本語版: IES-R, Posttraumatic Cognition Inventory日本語版: PTCI, TRGに関する項目), (4) 個人の罪責感の持ちやすさ (Trait Guilt Scale: TGS), (5) 日常生活における支障度とストレス (過去30日間のストレッサー: VAS, Sheehan Disability Scale: SDISS)

【結果と考察】

トラウマからの経過期間及びPDI得点を統制変数とし、

TGS, 自責的認知, TRGについて偏相関分析を行った結果、TGSと自責的認知の間に有意な正の相関が見られたものの、自責的認知とTRG, TGSとTRGの間には有意な相関は見られなかった。このことから、出来事依存性の罪責感の中でも、認知的側面 (自責的認知) と情動的側面 (TRG) は独立しており、PTSD症状や生活支障度に異なる影響をもたらす可能性が示唆された。

さらに、個人特性の罪責感から、PTSD症状やこれに伴う生活支障度への影響関係を包括的に検討するため、共分散構造分析を行った結果、採択可能と考えられるモデルが構築された ($GFI=.98$, $AGFI=.94$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$; Figure 1)。個人特性の罪責感からPTSD症状・生活支障度には、4つの影響性のプロセスがあることが示された。PTSD症状には、特性罪責感とTRGが影響しており、この影響性は、Shottenbauer et al. (2008) 等において指摘される、PTSD症状の維持要因としての罪責感の影響を示唆していると考えられる。一方、生活支障度には、個人特性の罪責感と自責的認知が影響しており、特性罪責感が高いほど、自責的認知は低いほど生活支障度が高いことが示された。自責的認知はPTSD症状との関連が弱く (Beck et al., 2004)、特定の行動への原因帰属や建設的な思考を促進するという特徴があることから (Frazier, 2000)、生活支障度を低減させるという結果が得られたと考えられる。

以上より、個人特性の罪責感と出来事依存性の罪責感とはPTSD症状や生活支障度に対し、それぞれ異なる影響を持っていることが示唆された。特にTRGは先行研究の知見と同様にPTSD症状に悪影響をもたらしていた。近年、このようなTRGに焦点を当てた治療技法が開発され、その有効性が示されている (Rizvi et al., 2009; Resick et al., 2008)。したがって、個人特性を含め、認知や情動という多側面から罪責感を詳細にアセスメントすることにより、患者の状態像により適した治療法の選択が可能になると考えられる。